

第3節 開発に伴う範囲確認調査

1 駄森積石塚

(1) 調査の契機と方法

諫早市土地開発公社が計画する工業用地建設に伴い諫早市栗面町541番地2に所在する駄森積石塚の範囲確認調査を平成30年2月16日から平成30年3月19日にかけて実施した。

計画では駄森積石塚全体が計画用地に含まれており、市教育委員会では計画との調整を図るために、国庫補助事業を活用して、遺跡の内容を確認する目的で地形測量と発掘調査を行った。

(2) 調査の結果

第63図の地形測量の結果では、南北7m、東西8m、高さ2mの盛り土で、すべて土で構成された盛り土ではなく、写真15~18で見るよう写真19のように礫が多く含んでいる。頂部は平坦ではなく写真19のように礫が集中している。西側から東側へ傾斜する土地に盛り土が行われており、盛り土西側の裾となる等高線は102.2m、東側の最も低い部分の裾となる等高線は101mである。その差は1.2mあり、東の裾から頂部までの高さは4m、西の裾から頂部までの高さは1.8mである。測量図にあるように平面形には古墳にみられる特徴は認められないため古墳ではないと判断できた。測量図から遺跡の性格を特徴付ける情報は得られなかった。

発掘調査は第63図・第64図にあるように、地形の傾斜に合わせて1箇所の試掘坑（1m×4.8m）を設定し土層断面と土層の堆積状況を確認した。その結果、積石塚の主たる土層である2層は多量の礫を含んでおり、江戸時代末の陶磁器が2点出土した。積石塚を形成している礫は中心部に進むにつれて多くなる傾向はあるものの、堆積に規則性は見出せないほか、加工痕のある石材は確認されなかった。

発掘調査の結果から古墳などにみられる土壌積みや版築などの人工的な明確な盛り土を行った痕跡は確認されなかった。盛り土からの明確な出土品はなく、積石塚の時代性も確定できなかった。

周辺の状況を確認したところ、駄森積石塚の西脇に南北方向に走る道上の長い平坦面が確認された。この細長い平坦面は幅約2mの規模で、駄森積石塚から北側では東に曲がり下っており、駄森積石塚から南では平坦で直線的である。ちょうどその西側にも里道が走っており、これらの道は栗面町と小ヶ倉町の境界を示していくことが判明した。駄森積石塚のすぐ北側には墓地が営まれておらず、集落の端ならではの土地利用であり、この塚も集落の端にある一つの構築物であろうということまでは理解できた。

しかし、範囲確認調査の結果からは、江戸時代以前に築造された人工的な構築物である可能性を積極的に指摘できる根拠はなく、二つの道に挟まれたこの積石塚は明治以降に造られた可能性も否定できない。このため遺跡の性格は不明と言わざるを得ない。

範囲確認調査の結果からは工事に際しては本調査を実施するまでの積極的な根拠を得られず、工事立会いを実施することが望ましいと判断した。

このような調査を行った後に、駄森積石塚は所有者の意向によって工事計画の範囲から除外され、現地において保存されることとなった。



写真61 駄森積石塚全景（南から）



写真62 駄森積石塚全景（西から）



写真63 駄森積石塚南側斜面（東から）

写真64 駄森積石塚北側斜面（東から）



写真65 駄森積石塚頂上（南から）

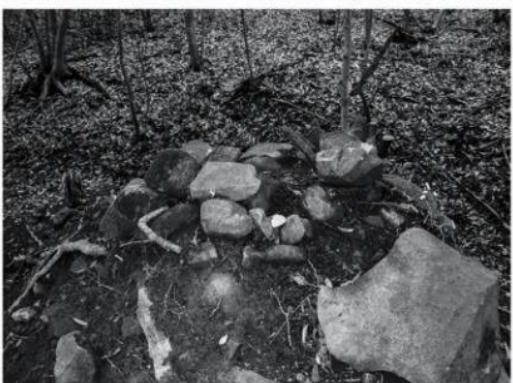


写真66 試掘坑完掘状況（西から）

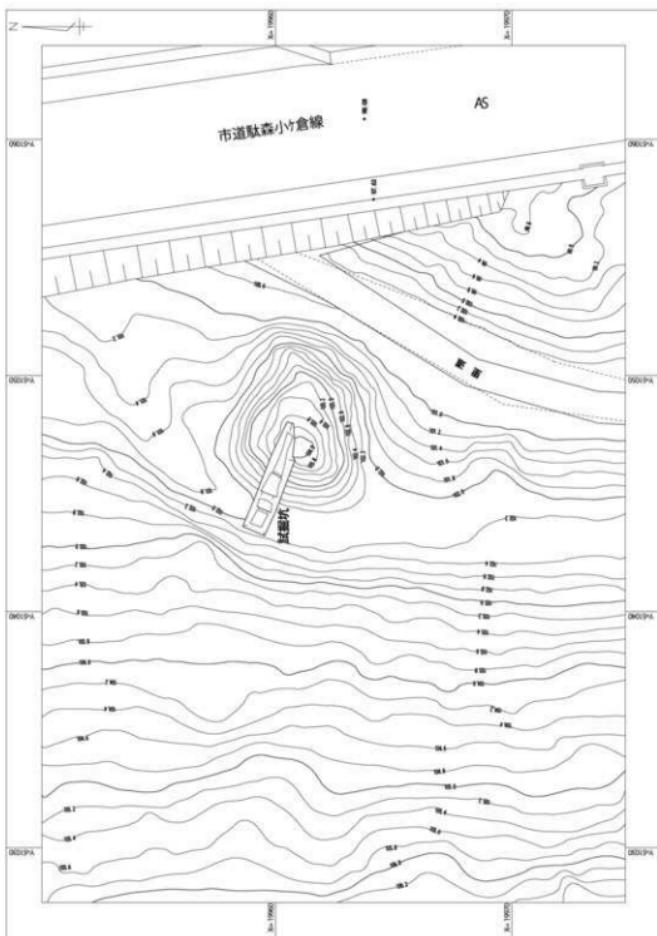




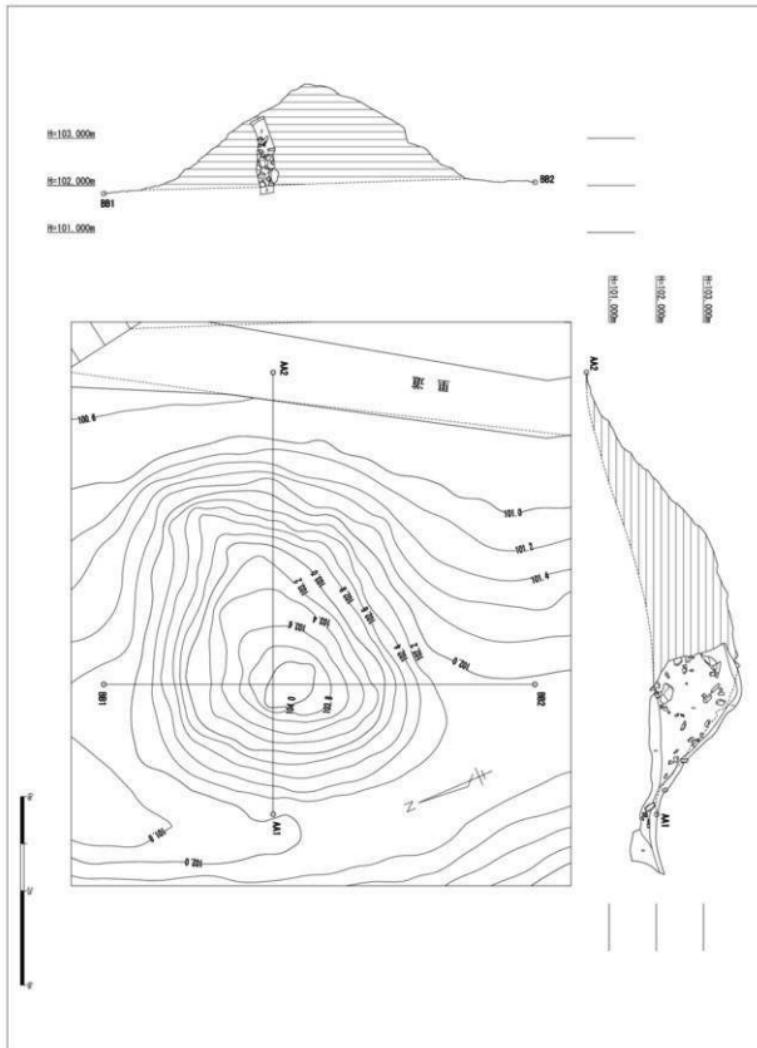
写真67 土層断面（北西から）



写真68 試掘坑奥壁（西から）



第63図 位置図 (S=1/200)



第64図 平面図・断面図 ($S=1/100$)

第4節 大型木製出土品の保存処理

諫早市指定有形文化財「唐比のくり舟」の保存処理に関する報告

（1）はじめに

「唐比のくり舟」は、所在は不明だが『水晶觀音縁起』の中に登場するとされている。あらすじは、「天暦10（956）年、この地の領主渡辺四郎五郎渡の姫であった虎御前が、楠の木を伐ってくり舟を作らせた。くり舟と姫は唐比の池に沈んでしまい、500年後、湖底から水晶觀音がくり舟に乗って浮かび上がった。」（『諫早市の文化財』参照）というものである。周辺には虎御前にかかわりのある石祠や寺、墓石（森ノ木の地蔵さん）などが建てられている。くり舟に関しては、実際に明治時代、この蓮池の蓮根の収穫をしていた際にも一度出土したという記録もあり、このとき船側は採集され、水晶觀音が奉られている曹洞宗「補陀林寺」の寺宝とされている。

昭和56年、市指定文化財となった本資料は長年水槽にて保管・展示されていた。指定文化財の価値を広く市民の人々に周知することを目的として、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を活用し、化学保存処理を行う前段階として、本資料の樹種と製作年代が不明であったため、樹種同定・放射性炭素（¹⁴C）年代測定の自然科学分析を株式会社古環境研究所に委託した（諫早市文化財調査年報 2016）。また、化学保存処理を株式会社葵文化へ業務委託しトレハロース含浸法を用いて空気中の保管・展示を可能とした。

（2）「唐比のくり舟」の発見と県内の出土事例について

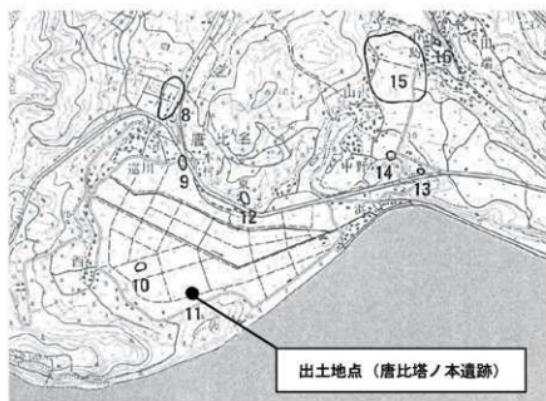
「唐比のくり舟」の発見

「唐比のくり舟」は、昭和49年1月18日に森山町唐比西名塔ノ本108-2番地の水田において排水溝工事中に発見された。（藤田 1980）その後、水を張った状態で現場の状態を維持したまま、水中で保管するために唐比温泉センター敷地内にコンクリート製の水槽が作られた。その作業と並行して、昭和49年4月5日から4月11日までの期間で長崎県教育委員会により緊急の発掘調査が行われ、出土状況の実測、平板測量、写真撮影などにより詳細な記録が作成され、取り上げが行われ唐比温泉センターの水槽へ移設された。

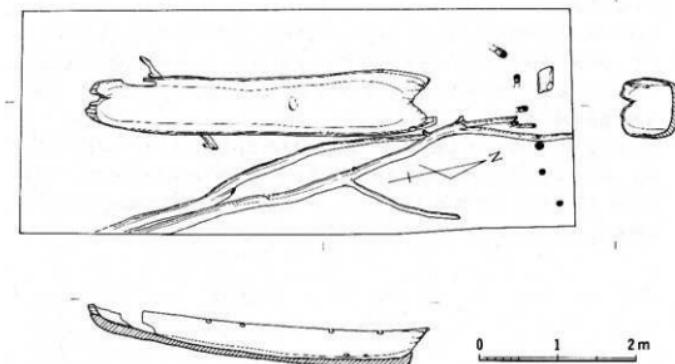
「唐比のくり舟」の出土地点は、唐比池の南端で標高1mに満たない場所（第65図）から発見された。北側3mの地点に現在の用水路があり、出土地点は水田として利用されていた。

「唐比のくり舟」の出土当時（写真69～71）の大きさは、全長446cm、最大幅83cmであり、北側先端から1.4mの位置での幅は外側74cm、内側70cm、深さは38cm、厚さは10cmと報告されている。一本をくり抜いて作ったもので、両先端を欠損しているが、横断面は丸味の付いた「コ」の字形をしており、西側の船縁（ふなべり）の上部に4箇所の梢円形の穴があり、東側の船縁にも同様な穴が2箇所ある。

第66図にあるように「唐比のくり舟」は主軸をN-13°-Eに向け、北側に約6°の角度で傾いた状態で出土した。「唐比のくり舟」のすぐ北側には木製の杭が出土しており、くり舟と垂直になるように並んでおり、時代的には同時期のものと考えられる。平面図と断面図の形状から、北側が船尾、南側が船頭と考えられる。



第65図 唐比のくり舟出土地点 ($S=1/25,000$)



第66図 くり舟出土状況図



写真69 くり舟出土状況

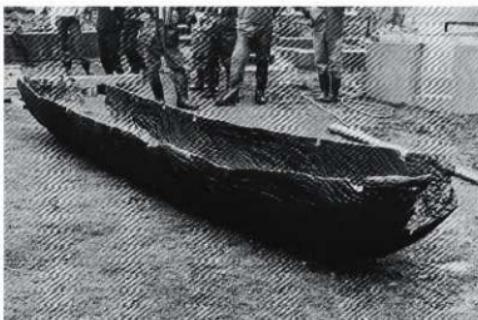


写真70 出土したくり舟（全体）

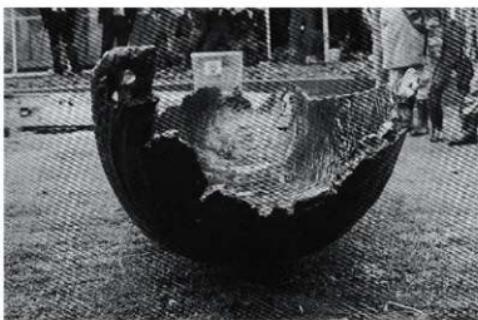


写真71 出土したくり舟（断面が丸みのある「コ」の字）

この他には時代を判断できるような土器や石器などの出土品は無く、昭和49年に発見された段階では「唐比のくり舟」が所属する年代は不明であった。しかし、昭和49年の発掘当時から、近隣の補陀林寺に伝わる水晶観音縁起に登場するクスノキの舟との関係性が重視されていた。その後、昭和55年3月31日に長崎県教育委員会により昭和49年の発掘調査の報告書（藤田 1980）が刊行され、昭和56年7月14日に森山町文化財として指定された。その後、平成28年まで唐比温泉センターの水槽において清掃や水の入れ替えなどを行なながら、コンクリート水槽で43年間保管されてきた。

長崎県内での出土事例

現在、くり舟の出土事例は「唐比のくり舟」の他に県内において2例確認されている。一つ目は、「唐比のくり舟」の出土地点から西北西に300mほどの地点（北森ノ木遺跡）で出土している。（藤田・町田 1990）木製のくり舟が昭和57年に出土し、写真と図面とが作成され、その後、出土地点に埋め戻され現地において保存された。そのくり舟は断面が半円形状で、長さ約25m、幅約1.1m、深さ約0.3mの大きさである。構造としては、「唐比のくり舟」が、一本の木から全体を造りだす完全な単材のくり舟であるのに対し、前後に他の部材を組み合わせ一艘の舟とする複数の木材を組み合わせる復材のくり舟で、準構造船と想定されている。

二つ目は、大村湾沿岸の多良見町舟津の伊木力遺跡で縄文時代のくり舟が出土している。船底となる部分が出土しており、長さ約6.5mで、材質はセンダンの木で、原本は直径1～1.5mの巨木であったと推定され、縄文時代の前期に位置付けられる単材のくり舟である。

平成9年に刊行された長崎県内の主な遺跡を紹介する『原始・古代の長崎県』の中で、「唐比のくり舟」は県央地域の主な52遺跡の中の一つとして紹介されている。（藤田 1997）「唐比のくり舟」はこの段階では所属する年代が不明であるが、縄文時代の伊木力遺跡出土のくり舟とともに県内でも希少な出土事例として紹介されている。

平成9年の段階において、長崎県内で確認されたくり舟の出土事例は、これら3点のみで、県内最古の事例が伊木力のくり舟、そして、くり舟の形や構造が分かる好例が唐比のくり舟となる。令和になった現在でも新たな事例が発見・報告されていないため、現時点でも同じ評価となる。

このような評価のある「唐比のくり舟」に対して、平成26年10月に開催された諫早市文化財保護審議会において、「年代測定を実施し、時代性を明確にし、水晶観音の伝承のとおり、平安時代後半の出土品となるのか、一本のくり舟という構造から縄文時代にさかのぼるのかどうかを確認するべき」という意見が出された。そのため、平成27年度に年代測定及び樹種同定を行うために、試料採取と分析作業を古環境文化研究所へ依頼した。

（3）年代測定と樹種同定の結果について

「唐比のくり舟」の自然科学分析については平成28年（2016）刊行の諫早市文化財調査年報Ⅱ（発行・編集：諫早市教育委員会）の中で報告しているが、ここで再度概略を紹介する。

「唐比のくり舟」の自然科学分析は資料の原材から一部を採取することで可能とされる樹種同定と放射性炭素(¹⁴C)年代測定法により行われた。試料はNo.1とNo.2の2箇所である（写真72）。No.2はNo.1より最外年輪（伐採時の年代に最も近い時期が算出される年輪）に近いと考えられる箇所である。



写真72 唐比のくり舟試料採取箇所

樹種同定とは、採取した試料の組織構造を観察し膨大な類例と比較することで樹木の種類を同定する分析法である。同定の結果としては、組織構造の詳細な観察と類例との比較によりNo.1とNo.2は共にクスノキと同定された（写真73）。

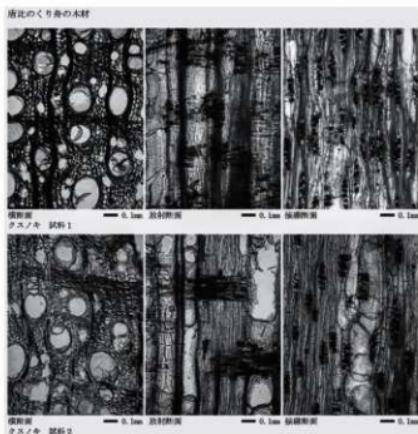


写真73 唐比のくり舟の採取試料とクスノキの試料

放射線炭素 (^{14}C) 年代測定とは、生物の組織を構成するもののうちの大体を占める炭素 (^{12}C 、 ^{13}C 、 ^{14}C) の中のうち、生命活動が行われなくなると年数を経るごとに破壊され減少するとされる放射線炭素 (^{14}C) より試料の年代を割り出す測定法である。放射線炭素 (^{14}C) は、5730年で半減するとされている。

表4 放射線炭素年代測定結果

試料No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代：年BP (暦年較正用)	暦年代（較正年代）：cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	29183	-28.65±0.13	1245±20 (1244±19)	AD 695-702 (5.4%) AD 709-746 (50.6%) AD 764-774 (12.2%)	AD 685-779 (82.0%) AD 791-830 (7.8%) AD 837-865 (5.6%)
No.2	29184	-28.95±0.14	1180±20 (1180±21)	AD 778-792 (13.0%) AD 804-842 (31.2%) AD 860-886 (24.0%)	AD 772-894 (94.1%) AD 932-937 (1.3%)

BP : Before Physics (Present), cal : calibrated, BC : 紀元前, AD : 西暦

測定結果は、加速器質量分析法(AMS)により得られた、 ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代（較正年代）を算出した（表4）。古環境研究所の所見によると、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素 (^{14}C) 年代測定の結果、No.1ではAD685～779、791～830、837～865年、No.2では、AD772～894、932～937年と算出された。前述のとおり、No.2がNo.1より最外年輪に近いと推定されることから、No.2の年代値の複数ある年代暦（2 δ ）のうち、より確率の高いもの（94.1%）を採用すると、No.2の暦年代はAD772～894年であることがわかった。

このことから、「水晶鏡音」伝説（写真79）の「くり舟」と、年代と木材が一致したと考えてよいと思われる。したがって、自然科学分析の結果からも「唐比のくり舟」は奈良時代における出土事例として県内初であると言うことができる。

（4）保存処理作業について

「唐比のくり舟」は空気中で保存・管理するために、平成28年から平成30年までの3ヶ年間、熊本県八代市の葵文化株式会社に文化財保存処理を委託し、トレハロースの含浸作業を行った。

トレハロースは、1994年までは希少糖の一つで高価であったが、1995年に日本でデンプンから作り出すことに成功し、大量生産が可能になった。トレハロース含浸法は、従来のPEG（ポリエチレンゴリコール）含浸法、スクロース（蔗糖）含浸法、ラクチトール（糖アルコール）含浸法に比べ、新しい技術であるが、酸性環境下や高温多湿でも安定した結晶状態を保ち、安価であるため脆弱な木材を保存するのに適している（伊藤ら 2013）。特に大型の木製品には適しているため、「唐比のくり舟」の保存処理にはこの方法を採用した。市指定文化財となって40年という長期にわたり水槽での保存・管理を行っていた脆弱な大型木製品である「唐比のくり舟」の木組織を補強し、より良い状態で空気中での保存・管理が可能となった。

今回、葵文化株式会社で行われた保存処理記録は、表5のとおりである。

表5 トレハロース含浸処理記録（株式会社莫文化）

遺物処理記録		(出土木製品)	
遺物番号	出土場	唐比西名塚の本	
処理年度	平成28～29年度	遺物名	唐比のくり舟
委託者	諫早市	処理担当者	(株)莫文化 遺物保存処理部 木古
保存処理法 トレハロース含浸処理			
保存処理過程			
H28 7/14～7/20	唐比廻集センターにて運搬用梱キ・梱包作業 (株)莫文化 文化財保存処理センターに搬入		
7/21～	搬入		
7/22～	搬出		
7/26～8/2	搬出搬入検査		
8/6～	作業		
9/16～	FRP製造成		
H29 3/21～3/24	金属イオン除去処理(FDTA3Na 25水溶液に没液後洗浄) トレハロース含浸開始(初期濃度10%)		
3/27			
9/27	トレハロース濃度5%で保育		
H30 1/16	トレハロース濃度5%で保育		
3/1～	トレハロース濃度5%で保育		
3/28	トレハロース濃度5%で保育。取上げスピットカッターにて溶離(溶離化処理) 崩落箇所にて風乾(乾燥機使用)		
3/28～			
9/12～	表面処理(スプレークリーナー使用) 兼合(エボキシゴムドライ使用)、補強(エボキシゴム使用)		
H31 1/30～	補強(エボキシゴム使用) 表面処理(スプレークリーナー使用)		
3/5～	補強(エボキシゴム使用)		
3/12	処理結果写真撮影		
3/14	最終搬入保管・搬出・搬送打ち合わせ 半艶調にてデータ保存媒体をCD-RW・DVD-Rに変更		
3/16	納品		
	搬送 クスクニ		



処理前写真



処理後写真

今回の保存処理に関しては、大型の脆弱な木材を長距離運搬したため、養生と梱包を徹底して行った。含浸作業前には、刷毛とシャワーによる洗浄を行った後、脆弱になった形状を維持するためFRP（繊維強化プラスチック）で型成形し、金属イオン除去を行い、トレハロースに含浸した。含浸後にはFRPを除去し、冷却・乾燥させトレハロースを結晶化させた。

(5) 出土したくり舟の中での位置づけ

全国で出土した船に関する資料を収集した一覧は、深澤芳樹により2014年に作成されている（深澤 2014年）。この一覧は2013年までに刊行された日本列島における古代までの船舶関係出土資料を収集したものである。その一覧によれば、全国で107ヶ所の遺跡でくり舟が出土しており、諫早市指定文化財の「唐比のくり舟」を加えると108ヶ所となる。108ヶ所の中で、「唐比のくり舟」と同じ時期である古代（飛鳥時代から平安時代まで）に属する事例は11例あり、九州では「唐比のくり舟」が唯一の事例となる。

このため、諫早市指定文化財の「唐比のくり舟」は、長崎県内においてくり舟が出土した最初の事例であり、さらに平安時代のくり舟であることから、九州でも貴重な存在であることが指摘できる。

ちなみに、本市多良見町に所在する伊木力遺跡で出土したくり舟は、縄文時代早期末から前期という年代となり、一覧表の中ではもっとも古い事例となる。

(6) 今後の課題

以上が、唐比のくり舟に関する自然科学分析及び保存処理の報告内容であるが、トレハロース含浸法については、ここ30年來の新しい技術であるため、長期的な保存状況についての情報に乏しい。

現在、「唐比のくり舟」は、自然光が入り込むことはなく常時空調が整った諫早市美術・歴史館のロビーにて保存・展示されている（註1）。

トレハロースに関しては、現時点では水分を10%含んだ状態で湿度95%RHまで吸湿せず、温度も一度結晶化すると97°Cまで溶け出さないとされる（伊藤ら 2013）。だが、全体にまんべんなく95%以上の率で含浸しているかの判断は難しく、確認するにはX線による透過写真で見極めるしかない（伊藤 2014）。しかし、大型の資料である「唐比のくり舟」はそのような確認ができなかつたため、含浸率も部分的な差がある可能性も否定できない。

今後、経年劣化がどのような形で起こるのか、その際には変形が起こるのか、また、人工光や常温にさらされた状態に対する耐久性がどれほどのものかは不明である。小さな変化も観察により記録していくことが今後の課題と言える。



写真74 唐比のくり舟の展示状況（船尾側から）



写真75 唐比のくり舟の展示状況（舳側から）



写真76 唐比のくり舟の展示状況（船側から）



写真77 展示用パネル①

トレハロース含浸処理法

出土した木製品をそのままの状態にしておくと・・・

乾燥により変形してしまいます。
そのため、木製品は出土後は水に漬けて保管します。

トレハロース含浸処理法の特徴

- ★ 木材などの木質では約2カ月で劣化ができます！
- ★ 処理後の保管環境が温湿度の高い場所でも保管が可なります！
- トrehalose(トレハロース) (人・動物用) の一種で、醗酵品や化粧品にも使用されています。
- 形態ですが、虫(アリ)に食べられることはありません。
- 元々食品なので安全に作業することができます。

展示など活用できるように『保存処理』を行います！

- ①トレハロース水溶液に木製品を漬け込みます。
- ②数ヵ月後で取上げ、風乾させてトレハロースを結晶化させます。
- ③表面に残っている結晶をスチームで洗浄します。

資料提供／長崎県埋蔵文化財センター

写真78 展示用パネル②



写真79 水晶観音伝説

註

1 諫早市美術・歴史館の所在地は「諫早市東小路町2-33」である。

参考文献

- 諫早市文化財調査年報 2016 「市指定有形文化財「唐比のくり舟」の自然科学分析」「諫早市文化財調査年報Ⅱ」諫早市文化財調査報告書 26, 63-66頁。諫早市教育委員会
- 伊藤幸司 2014 「トレハロース含浸処理法の開発と実用化—より環境にやさしく経済的な方法へ—」 KAKEN
- 伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2013 「ラクチートルからトレハロースへ—糖類含浸法の新展開—」「考古学と自然科学」 65, 1-13頁。日本文化財学会
- 深澤芳樹 2014 「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」 国際常民文化研究叢書5－環太平洋海域における伝統的造船技術の研究－。185-233頁。神奈川大学
- 藤田和裕 1980 「唐比塔ノ本遺跡—北高来郡森山町所在一」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第50集、65-72頁。長崎県教育委員会
- 藤田和裕・町田利幸 1990 「唐比北森ノ木遺跡—北高来郡森山町所在一」『長崎県埋蔵文化財調査集報XⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集、125-141頁。長崎県教育委員会
- 藤田和裕 1997 「唐比塔ノ本遺跡・北森ノ木遺跡」『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』、568-570頁。長崎県教育委員会

虎御前とくり舟

今から1000年前の平安時代ごろの物語です。

唐須原（現在の唐比）に住んでいた祇主の渡辺西郎五郎渡の前に、虎御前という花嫁がおひりました。娘はまだ少いときには舟を育てましたので、乳舟に育てられていきました。

祇主が住む前に大きなクスノキがありました。娘が父と舟がないままで泣くときは、乳舟がクスノキの下に連れて行って子守唄を歌うと、娘は不思議と泣き止んで、いつも楽しそうに遊びはじめました。やがて娘は白蓮の花のように美しく育ち、道場の詳開となりました。

ある夏の日、娘は大事にしていたクスノキで舟を造るようにせがみました。まわりの者が止めてを開き入れず、しかたなく村人にお願いして造らせました。完成した舟を家来たちが頃頃の池に舟で運んでみると、なぜか舟は進みません。ところが、娘と乳舟に乗るの不思議と舟は動き出しました。ちょうど娘の胸元あまりで舟が進んだとき、急に空が雲におわねて嵐になりました。岸には舟と共に沈んでしまいました。娘は舟はなんとか脱かりましたが、娘の姿はどう見つかりませんでした。

その晩、池の川から横櫛の音が聞こえてきました。日の入りはまだいいん不思議なり、目に白い横櫛の音を聞きに岸に多くの人が集まりました。

くり舟と水晶観音様

今から500年前のこと、全国で舟が海らずともひどい水不足になりました。特に九州は豊後の福岡藩の船もありません。諫早原天皇は、この水難を救うために種々な御縁を祈願しましたが、全く雨の降る気配はないまま日々が過ぎてきました。

ある後、諫早原天皇が寝ていると枕元に水晶の觀音様が現れて「福島の街（現在の佐賀城と長崎城）の唐門前に由緒ある池がある。その池に向かって祈願すれば、必ず雨が降るであろう。」と告げられました。諫早原天皇はさっそく伊佐（現在の諫早）の城主大庭石見守に祈願するように命じました。西郷石見守は茂庭守の菩提寺から嚴道和尚を招いて池に祈願したところ、大雨が降りはじめ、やがて天井は空間に広がりました。不思議ことに、この雨のなか唐門前の池にクスノキの舟がぽかり浮かび上り、中に娘の乗った舟をついた光り輝く水晶觀音様が座っていました。西郷石見守は、この水晶觀音様を崇め好み、この池の北にある船尾といふ地に水晶觀音様のための塔を建てました（現在の船橋塔）。この水晶觀音様が座っておられたくり舟は、むかし虎御前と共に育んだクスノキのくり舟であろうと伝えられています。

報告書抄録

ふりがな	いさはやしぶんかざいちょうさねんぼうさん									
書名	諫早市文化財調査年報Ⅲ									
副書名	平成27年から令和元年までの調査									
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書									
シリーズ番号	第27集									
編著者名	新井実和、野澤哲朗、柿田佳央理									
編集機関	諫早市教育委員会（諫早市政策振興部 文化振興課）									
所在地	長崎県諫早市東小路町7番1号									
発行年月日	令和3年3月1日									
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
おおのなこ みと 大峰古墳	いさはやし こながいとうおのみな 諫早市小長井町大峰	42204	242	32°54'33"	130°9'42"	H28.12.9~H29.1.25	-	保存目的		
の ものかついしづか 馴森積石塚	いさはやし くわももまち 諫早市衆面町	42204	076	32°49'9"	130°2'42"	H30.2.16~H30.3.19	4.37m ²	範囲確認		
おおのわせきよとく 大渡野番所跡	いさはやし しおのわせきよとく 諫早市下大渡野町	42204	250	32°52'23"	130°1'8"	H31.2.14~H31.3.15	-	保存目的		
はか ジブの墓	いさはやし ほかぬまち 諫早市早見町	-	-	32°47'35"	130°3'38"	R1.12.4~R2.2.17	-	保存目的		
はか ピッチの墓	いさはやし してんじまち 諫早市天神町	-	-	32°48'4"	130°3'35"	R1.12.4~R2.2.17	-	保存目的		
ひんぐいせき おりのくらう 金谷遺跡の織部灯籠	いさはやし ひんぐいせき 諫早市金谷町	42204	038	32°50'50"	130°3'3"	R2.2.12~R2.3.28	-	保存目的		
しんみちまち おりべ さんろう 新道町の織部灯籠	いさはやし しんみちまち 諫早市新道町	-	-	32°50'5"	130°2'60"	R2.2.12~R2.3.28	-	保存目的		
からこどものと いせき 唐比塔ノ本遺跡	いさはやし もりやまといせき 諫早市森山町唐比西	42204	155	32°47'32"	130°7'56"	H28.7.14~H31.3.16	-	保存処理		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
大峰古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室・埴丘	-	市指定史跡					
馴森積石塚	その他の墓(塚)	-	-	-	-					
大渡野番所跡	その他の遺跡(番所跡)	近世	石列、石垣	陶磁器	市指定史跡「大村街道」の街道沿い					
ジブの墓	-	近世	自然石立碑	-	-					
ピッチの墓	-	近世	自然石立碑	-	集落の墓地内に所在					
金谷遺跡の織部灯籠	石造物	中世、近世	-	-	-					
新道町の織部灯籠	石造物	中世、近世	-	-	-					
唐比塔ノ本遺跡	遺物包藏地	中世	杭列	くり舟	トレハロース含浸法による保存処理					
要約	大峰古墳	市指定文化財「大峰古墳」の規模や構造の基本的な資料を作成し、今後の自然災害等への石室崩落及び復元作業への備えができる。								
	馴森積石塚	地形測量と土層観察を行い、積石塚の構造が確認できた。								
大渡野番所跡		地形測量を行うことで、近世長崎警備の要衝であった番所跡の規模や構造を把握できた。								
ジブの墓		キリシタン伝承のある自然石立碑1基を実測、記録した。銘文なし。								
ピッチの墓		キリシタン伝承のある自然石立碑1基を実測、記録した。銘文なし。								
金谷遺跡の織部灯籠		戦国時代～江戸時代の造立と思われる織部灯籠1基を実測した。銘文なし。								
新道町の織部灯籠		戦国時代～江戸時代の造立と思われる織部灯籠1基を実測した。銘文なし。								
唐比塔ノ本遺跡		年報Ⅱ掲載の年代測定と樹種同定に引き続き、市指定文化財「唐比のくり舟」にトレハロース含浸法による保存処理を行った。現状は経過観察であるが、唐比のくり舟の空気中の保存・展示が可能になった。								

令和3年3月12日発行

諫早市文化財調査年報Ⅲ

諫早市文化財調査報告書 第27集

平成27年度から令和元年度までの調査

発行・編集 諫早市教育委員会

〒854-8601

諫早市東小路町7番1号

印刷 (株)昭和堂

〒854-0036

諫早市長野町1007-2